

Noisette Press

現地在住ライターがリアルなパリをお届け

Févr. 2026

Numéro 145

2

今月のお客さま

下重 恭子さん



帽子職人 in Paris! 社交界マダムに鍛えられた 帽子制作技術とは?!

今回はパリで帽子職人として1年弱研修をされた経験のある下重恭子さんにインタビュー! 現在は、東京の西荻窪に帽子工房「シャポーヌ」を経営し、年間数百の帽子づくりを手掛けている下重さんに、パリで出会った人々や、当時の思い出について語っていただきました。

オペラ座裏門で号泣した日

◆帽子職人になられたきっかけを教えてください。

元々自分の頭が大きくて、市販の帽子が全然入らないんですよ。それで自分で適当に作ってみたら面白くなって、衣装全体を学ぶのは大変そうだけど、帽子ならできそう! と思って始めました。美術系の仕事をしながら帽子学校に3年通って、そこから本格的に舞台の帽子を手がけるようになりました。

◆今のお仕事「シャポーヌ」はどんなお仕事がメインですか?

舞台、バレエ、コンサート、テーマパークの帽子がほとんどで、年間数百個作っています。スタッフ2人と外注さんで回していて、個人オーダーもできる範囲で受けています。

◆パリに行こうと思ったきっかけは?

40歳を過ぎたころに、文化庁の海外研修制度*を知って、思いきって応募したんです。ご縁があって、パリ・オペラ座の衣装主任さんが私の帽子をとても褒めてくださったことがあり、その主任さんならきっと研修先として私を受け入れてくださるだろうと思って。

◆夢のオペラ座研修は順調に始まったんですか?

いえ、1ヶ月目から大ピンチでした。主任さんは受け入れてくださっていたんですが、事務の方がフランスの保険に入らないとダメだと厳しくて。文化庁のほうでも対応が難しくて、結局追い出されて、オペラ座の裏門で号泣しました。

◆それでも諦めなかつたんですね?

せっかくパリに来たんだから帽子づくりはやりたい! と思って、街の帽子アトリエに面接に行き

ました。作った帽子の写真を見せたら「これあなたが作ったの? ジャあ明日から働いて!」と即採用。夜10時まで働きました。言葉はほとんど通じなかったけど、職人仕事は技術があればなんとかなるんです。フランス語で困ったのは、仕事の締め切りの話くらいですが、筆談にすればどうにかなりました。

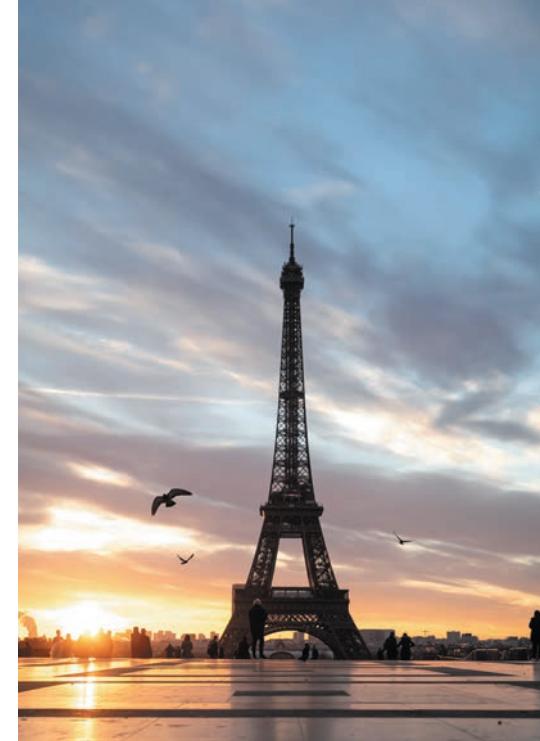
困っても意外となんとかなる!

◆一番印象に残っているエピソードは?

帽子職人を探しているお金持ちはフランス人マダムと知り合って、毎週1個パーティー用の帽子を作る「帽子お抱え職人」になったことでしょう。シャンゼリゼの近くの高級アパルトマンに住む方で、「売ってる帽子じゃ嫌なのよ」と、ドレスに合わせて羽やリボンをあしらった帽子を、道具のない自宅で、型から必死に作っていました。帰国すると言ったら怒られて、最後に3~4個まとめて頼まれました。パリの高級誌の社交欄にその帽子で登場されていたこともあります。帰国後、マダムから連絡がきて、お嬢様の結婚式の帽子を頼まれて作ってお送りしました。気に入られてたってことかな?

◆フランスと日本の帽子の違いを実感したことは?

頭の形が全然違うんです! フランス人は縦長の橙円、日本人はまん丸なんですね。あと、パリで日よけの帽子をかぶっている人は大体日本人。あちらは日よけじゃなく純粋におしゃれでかぶるんです。それにアトリエでは古い帽子の量が博物館級! 羽の付け方、リボンの結び方が勉強になりました。



[Rouge le soir, espoir
夕方の赤は、希望。]

photo by Saori

◆パリでの暮らしはどうでしたか? 部屋探しや観光は?

部屋探しは大変でした。エッフェル塔が見える素敵な部屋が決まったと思ったら、「もっと長く借りられる人が現れたからごめんね」って一方的にキャンセルされて…スーツケースを持ってまた一から出直し。銀行口座は住所がないと作れない、部屋を借りるのには口座が必要、の堂々巡り。観光はほとんどできず、クリニヤンクールの蚤の市に毎週通って材料を買ったりする毎日でした。帰国後に改めて観光しに行ったくらいです。

◆パリで一番学んだことは?

人の縁が全部繋がっていたこと。滞在許可証の書類を運んでくれた人、翻訳者を紹介してくれた人、弁護士事務所に行く途中で偶然通りかかった通訳さん…本当にラッキーの連続でした。困った時は意外となんとかなるんですよ。

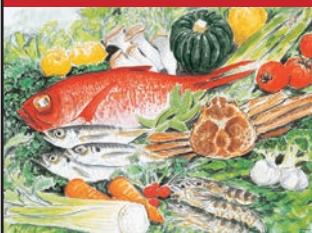
◆今後の夢を教えてください。

パリで自分の帽子展をやりたいですね。最近、オペラ座の衣装担当さんが工房に来て「帽子の人いないのよね」って言ってくれたので、お声がかかるならまた行っちゃうかも知れないですね(笑)。



*文化庁の海外研修…文化庁が主宰する新進芸術家の海外研修制度のこと。美術、音楽、舞蹈、演劇、舞台美術等、映画、メディア芸術の各分野において、新進芸術家が海外の大学、芸術団体、指導者等の充実した環境の下で実践的な研修に従事する機会を提供。

毎週土曜日あさ9時30分から、テレビ朝日で放送。 tv asahi 5CH



食材ひとつに、多彩なドラマ。

毎週土曜日に放送中の「食彩の王国」は、身近な「食材」たちが主役。さまざまな食材が織りなす食文化の歴史や産地の風土…。そこに流れる時間をひも解くことで、人と食材のかかわりを探っていきます。

食彩の王国



語り 葉山丸ひろ子

番組ホームページ www.tv-asahi.co.jp/syokusai

【制作】 tv asahi テレビマンユニオン ViViA!!) 【企画協力】 ビデオプロモーション 提供 TOKYO GAS

マダム愛の わたくし ミュラン

第145回

日本人の憩いの場。 パリにあるフレンチ食堂

パリで“日本人の心のよりどころ”として静かに愛されているフレンチ食堂「H. KITCHEN」。その名前を聞くたび、気になりながらも訪ねられずにいたのですが、先日ようやく友人と足を運ぶことができました。2012年、日本人シェフが開いたネオビストロで、どこか温かく落ち着いた空気が流れるお店です。フロアの女性がやさしく日本語で対応してくれること、そしてメニューに日本語訳が添えられていることも嬉しいポイントで、旅先でフランス語に不安がある方にも心強く感じられます。

この日いただいた前菜はクネル。ふんわり軽い“フランス版はんぺん”的な生地の中にフォアグラがとろりと忍び、ひと口ごとに贅沢な香りが広がります。続くメインは見た目以上にボリュームがあり、添えられたキノコの豊かな香りがとても印象的でした。火入れはややしっかりめでしたが、次回は少しレアでお願いしてみようかな、と思えるやさしい味わいです。



デザートにはミラベル（西洋スモモの一種）をたっぷり使った一皿を。サクッとしたメレンゲと爽やかなソルベ、果実の甘酸っぱさがバランスよく重なり、食後でも心地よく楽しめる仕上がりです。

全体的に味つけはややしっかりめで、ワインとの相性がよさそう。お酒が苦手な方でも、フランスらしい美味しいパンと合わせると、また違った楽しみ方ができそうです。パリ旅の途中でふとフランス語に疲れてしまった時に、そっと寄り添ってくれるようなお店。「H. KITCHEN」は、そんな安心感と美味しさを持つ一軒だと感じました。

- A. シンプルな内装。冷え冷えのシャンパンで乾杯。
- B. 日本語訳された手書きメニューにほっこり。店主の温かさを感じます。
- C. ふわふわとろ～のクネル。これをつまみに永遠にシャンパンが飲めそう。
- D. ジロル菖を贅沢に使った牛肉のお料理。懐かしい味。
- E. 甘すぎない日本人好みの味でこの日の料理の締めにぴったり。

writer マダム愛

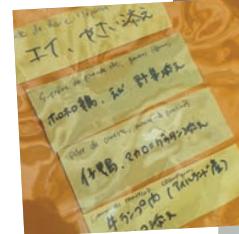
東京で知り合った仏人男性に連れ去られ、気が付けばパリジェンヌとやらに。パリのレストランと生活、2つのブログを書いてます。

blog マダム愛の徒然パリ日記

<http://www.paris777.blog.fc2.com/>

blog マダム愛のアパートの鍵貸します

<https://www.madameai.com/>



B



D



E

癒し系フランス男チヨームの

パリで茶柱 シルブプレ

Chanoki 第2章スタート!

Bonjour! 昨年11月初めからの1ヶ月半、とっても慌しかった当店。実は12月末で、3年間営業した現店舗の賃貸契約が終了。光陰矢の如し、Chanoki「第1章」の終わりだったのです。新店舗探しに追われ、11月半ばのある日、隣町 Montrouge(モンルージュ)で「ここだ!」という空き店舗を見つけ、早速不動産屋に連絡。永遠のように感じられた書類提出と電話のやり取りが続き「年内に決まるのか?」と不安な日々。そしてついに!忘れもしない、12月19日に不動産屋からお電話が!

年末年始は契約書の微調整に追われつつも、家族で仏中央部の田舎の村でひと休み。「新しいお店に引越しするよ!」と娘に告げた時、いわむらかずおの『14ひきのひっこし』(童心社)を思い出したのか、とても嬉しそうに「ひっこし!やったー!」と叫んだ彼女の輝く目と、笑顔でふくら盛り上がった赤いほっぺが忘れられません。

2026年、Chanoki「第2章」スタート。来月は、新店舗で茶柱の立ったお茶をいただけたら。それでは à bientôt!



writer ギヨーム・ユルボー

パリ郊外にある日本茶専門店「CHANOKI」店主。日本留学中に小笠原流煎茶道に出会い、その奥深さにハマる。お店では日本の農家から直接買い付けたこだわりの茶葉が味わえる。

[Instagram](https://www.instagram.com/@chanoki_paris)

[HP](http://www.chanoki.fr/)



パリに暮らす猫パリにゃん・リリちゃんとゴキゲン指揮者キヨリのほのぼの生活

パリにゃん通信

アブリコ14歳!

主 宅する「パリ・アブリコ合唱団」が

14周年を迎えました!フランス人と日本人の仲間で楽しく歌いたいと思って作った日仏アマチュア合唱団は現在40人程在籍しています。

実はアブリコで出会った日仏カップルも多数あり、今や結婚して赤ちゃんまで授かったカップルまでいて、私にとってこんなに嬉しい事はありません。(密かに、お見合いオバさんと呼ばれている私 笑)。日本に帰国された団員さん達とも絆は切れず、アブリコの友情は一生の宝物だと思っています。今年もみんなで思いっきり笑って歌って人生の素晴らしい思い出と一緒に作ろう! 今秋にはドイツ公演、そして(ちょっと早いけどお知らせ)来年15周年には念願の日本公演します!! 待っててね♡



writer 押田杏里

日仏混合アマチュア合唱団「パリ・アブリコ合唱団」を主宰する指揮者。パリで猫のリリちゃんと旦那様と「今を生きる」をモットーに暮らしています。

[Instagram](https://www.instagram.com/@abricotp)

遊びごめ! ミュゼの遊び

今更聞けないフレンチアート

モネの食卓

19世紀ジヴェルニーに息づく美意識

去る2025年12月17日、冬の陽光降り注ぐ穏やかな日「印象派を巡る旅2026、ノルマンディーとパリ地方で祝うモネ没後100年」の記者発表に行ってまいりました。

フランス観光開発機構の主催のもと、ノルマンディー地方観光局およびパリ地方観光局の方々が来日。モネへのオマージュとして、発表会は東郷記念館の日本庭園に面した会場で行われました。今年はモネ没後100年。ノルマンディー地方とパリ地方では、さまざまなイベントが開催されます。

記者発表ではイベントの概要、モネの画業について語られましたが、一番印象に残ったのは、モネの義曾孫フィリップ・ピゲ氏が語った、「モ

ネと食」に関するお話。

モネは若い頃貧しく、ジャガイモばかり食べていた時期もありましたが、ジヴェルニーで名声を得てからは美食の喜びに目覚め、その美的センスは食器や食卓のしつらえにまで及びました。

モネの好物をコース仕立てで表現すると、前菜は、卵黄を生クリームとパセリで和え、オーブンで焼いた「ウフ・ベリション」。メインは、生クリームとほうれん草を交互に重ねた舌平目のフィレンツェ風。デザートはサクランボのクラフティ。聞くだけでも色鮮やかで、食卓そのものが絵画のよう。時には、ルノワールやセザンヌ、政治家で友人のクレマンソーも食卓を囲み、芸術談義に花を咲かせたといいます。

モネは食事の時間にも厳格で、朝食は6時アンドウイットと白ワイン、昼食は11時半。ピゲ氏のお母様は、それに間に合うよう学校を早退していたのだと。そして夕食は19時。こうしたルーティンによって、モネの日々のリズムは刻まれていたそうです。

レセプションでは、モネが好んだ料理がいく

つか再現され、私はウフ・ベリションをいただきました。ゆで卵が愛らしい一皿に変身していく、モネもこれを食べていたの

「印象派を巡る旅」プロモーションイメージかと、19世紀の草上の昼食(モネ)／オルセー美術館ジヴェルニーに思いを馳せました。

*イベントに関する詳細は、フランス観光開発機構HP内「印象派を巡る旅2026」参照
<https://www.france.fr/ja/unmissable/monet-impressionnisme-2026/>

writer 妹尾優子

仏語教師の傍、仏文学朗読ラジオ「Lecture de l'après-midi」の構成とナレーションを担当。美術史＆日本史ラブ。日仏の文学からアートまで深堀りする日々。

HP <https://note.com/tabichajikan/m/750819c9bc7>

仏人添乗員リラの

日本リラ散歩



売り切れのポンボンドロップ
シール売り場

フランス版の平成女児

最近SNSをスクロールしていたら、「平成一桁ガチババア」の文字列が目に留まってしまった。平成5年生まれとして最初は体が拒否反応を起こしたけど、平成はもう「レトロ」の領域に入っているんだもんね。

「平成女児」でシール交換が再びブームになり、シールが好きな私は話題のポンボンドロップシールが気になっているけど、わざわざ韓国まで買っている人がいるぐらい日本でどこも手に入らないよね。昔からシールを集めるのが趣味だったけど、このブームで日本の「シール交換文化」をはじめて知った。今まで買って満足しているだけで結果使わないのはもったいないと思っていたが、こういう楽しみ方もあるんだと、新しい発見になった。

これで、フランスでも「交換文化」があったのを思い出した。ドイツ人によって作られた巨大な耳と足を持った白いネズミ「Diddl」というキャラクターが、フランスで90年代後半、2000

年代に大流行し、幅広いグッズや文具に展開されていた。その中で特に人気だったのが、ペーパーパッド。たくさんの絵柄、サイズ、香り付きのものもあり、みんなが欲しがっていた。自分のコレクションをバインダーに収納して、交渉しながら学校でその紙を交換していた。今でも紙の香りを覚えていて、まさにフランスの「平成女児」の象徴だと思う。その後「Diddl」熱がおさまって2010年から徐々に消えてしまったが、懐かしいものやレトロが流行っているなか、なんと2025年の秋に「Diddl is back」という新しいラインナップでカムバックしている！次回フランスに帰った時、昔好きだった「Diddl」の新商品をチェックしてみようかな～。



writer リラ

東京で翻訳者としても活躍する30歳のフランス人女子。持続可能な社会の実現に向けての活動もする。趣味は編み物とベランダの植物の世話。

トモクンの

アレコレ、パリコレ、アンダコレ～

ケンゾーのメンズコレクションは伝説の旧高田賢三邸にて発表!

1月20日から25日まで、メンズコレクションが開催されました。特に印象深かったのがケンゾーのプレゼンテーション。というのは、何とブランド創始者の高田賢三さんが建てた家で発表されたから。家は、バストイユのスデンヌ通りの建物の中庭に建てられていて、プールや鯉が泳ぐ池、茶室まで備わっています。

賢三さんの現役時代にケンゾー社にて実習生をしていた縁で、30年前にお宅に伺ったことがあります。そこかしこに骨董品が置かれ、まるでギャラリーのよう。超絶イケメンの執事に、ランニングパンツとTシャツを出しておくように指示する賢三さん。話を聞くと、当時としては画期的な美容技術だったプラセンタを使用す

るスイスのメンテナンス施設へ行くとか。それぞれの部屋には生花が飾られ、それだけで月に20万円は下らないという話でしたし、ほとんど天上人の生活を送っていました。

それもそのはず、ルイ・ヴィトングループがケンゾー社を100億円以上で買収したことによって、賢三さんはパリでも有数の富豪となっていました。周囲には、賢三さんにたかっていると噂の立つ人々が常にはりつき、当時の知人が「賢三さんを麻雀に引き込んで、たくさん掛けさせて巻き上げましょうよ」と別の友人に悪だくみを持ち掛ける現場に遭遇したくらい。周りがそんな人ばかりだったら人間不信に陥りそうだけれど、天真爛漫な賢三さんはどこ吹く風。

それはそうと、バストイユの家はその後パリの大手中華スーパーのオーナーが購入し、転売が繰り返され、その間に内装を隈研吾氏が手掛けました。外装は当時のまま。最終的にイベント企画会社社長がオーナーとなり、今回のために特別に貸してくれたそう。金ピカのタイの

仏像をアシstantが倒して首ционパになららしいとか、賢三さんはパーティで酔っ払うと毎回裸になっていたらしいとか、プールの水が漏れて、階下の某アパレルブランドの服が駄目になったらしいとか。様々な噂や逸話を思い出しては胸がキュンとなつたのでした。



writer トモクン

トモクンという名の45歳。在仏27年。ファッショングジャーナリスト(業歴17年)は仮の姿で、本當はただの廃品回収業(業歴5年)。詳しくはブログ「友くんのパリ蚤の市散歩」にて。

blog 友くんのパリ蚤の市散歩
<http://tomas.exblog.jp>



フランスおバカニョース
仏学生にお馴染みのB-C4色ボールペン(青・黒・赤・緑)、新聞記者シリルさんは使い切るまでの時間が知りたくなつた。仕事柄ペンを使うことが多いとはいえ使い切るのに4ヶ月、彼の計算では線にして6・5km書き続けたことに！

編集長 吉野亜衣子の 毎日N.Y.で困ります

第23回

閑散期のNYブロードウェイミュージカルに人気歌手NE-YOが登場

二 ニューヨークの路上では「お金ください」のサインと一緒に座っている人がたくさんいるのだけれど、そんなに悲壮感は漂っていない印象。お友達のAさんの家の前に毎日座っている女性は、季節ごとに新しい服を着ているし、札束を数えていることもあるし、こないだは「ハッピーバースデー」の風船を持っていたとのこと。めでたい、基本的に明るいのである。

そんな陽気なニューヨークだが、雪は降るわ、最高気温がマイナス10度だわ、気温は極寒である。一つだけいいのは観光客が少なくブロードウェイミュージカルの格安宝くじチケットが当たりやすいこと。毎日当たるのでどれに行くか悩む日々。

先日は「ヘルズキッチン」に当たり、アリシアキーズの自伝的舞台すでに鑑賞済だったのだけど迷わず行ってきた。なぜなら、NE-YOが出るから。NE-YOとは、グラミー賞も受賞した、踊れて歌がうまく、言うなればマイケルジャクソンの後輩的なスーパースターである。マイケルジャクソンやアッシャーよりも、見た目がちょっとひょうきんそう。宇多田ヒカルと曲を出したり、好きなアニメはドラゴンボールでベジータが好きだったり何かと親しみやすいが、ビヨンセやらセリーヌディオンやらに楽曲提供するなど、ちゃんとアーティストである。いつも帽子をかぶっている。必ず帽子を沢田研二のように斜めに



被って現れ、郷ひろみのジャケットプレイのごとく外したり付けたりする。大学時代バンドをやっていた時に、みんなこぞってコピーして、青春を彩ってくれた。そんな彼が期間限定でヘルズキッチンに主役のお父さん役で出演するというニュースが！これは大変なチケット争奪戦になるぞー！……取れた。あれー。隣で夫も「あ、俺も当たった」全員当たってる？みんな、NE-YOをなめてもらっちゃ困るよ。

夫は仕事のため、私と次女とスキップで劇場へ。私たちは二階席の三列目を40ドルくらいで購入したのだけど、前の2列誰も座っていないで実質1番前。隣も通路まで5席くらい誰もいないので荷物置き放題。みんなどうした。スペシャルゲスト来てんだぞ！うまくやれるか、NE-YO。少し不安になってきた。結果、最高のショーであった。NE-YOは少し緊張していたが、いい加減男の役で、チョイチョイアドリブを効かせて笑いも取っていた。ちなみに帽子はかぶってなかった。とにかく声が素晴らしいで、いつものダンサブルな曲ではなかったのだけど、ミドルテンポやバラードでこんなに心を震わせてくるのかと。ティッシュがぐちゃぐちゃになるくらい泣いた。隣のお姉さんも泣いていた。

最後のカーテンコール、NE-YOは真面目に他のキャストと同じ振り付けで踊り、目立とうともせず最後少しだけ奇妙なポーズを取ってはけていった。他の俳優さんの歌も素晴らしい、歓声も凄まじく、謙虚にならざるを得ないNE-YOにまた感動。調べたら年齢は二つ上。違う畑に挑戦して本当に偉い。私も～！あたらしい世界に挑戦～する～？可能性もあるかも～？

writer 吉野亜衣子

ラジオ局を辞め、夫の留学についてパリへ。帰国後、日仏文化交流のための NOISETTEを設立。2022年で設立10周年。2024年春よりNY在住。

HP <https://note.com/noisettepress>
podcast <https://podcasters.spotify.com/pod/show/cafenoisette>

編集後記

ベトナムは2月中旬に旧正月（テト）を迎えます。クリスマスが終わるとすぐに赤と金色で彩られた飾り付けがあちこちに。街中キラキラ！また「テト玉」と呼ばれるお年玉をお世話になった方にお渡しする風習があり、縁起のよい赤い封筒に赤いお札（200,000VND）を用意します。私ももらいたいけど、立場はあげるばっかりです（笑）。（編集Y）

編集後記

2月のフランスはニースやダンケルクなど各地でカーニバルが行われるそうです。ニュースでは仮装と音楽で大騒ぎの様子が流れますが、多くの人にとっては「あ、今年もやってるね」という距離感だとか。日本で言えばTVでナマハゲを見る感じ？街は案外静かで、カフェにはいつもの時間が流れているそうです。私も一度は生でみてみたい気もしますが、やっぱり寒いですよね…。（AD F）



ご感想や配布希望、広告出稿などに関するお問い合わせは info@noisette-paris.net までお願いいたします。



もともとは「結婚」という名詞。「セレモニードゥマリアージュ（結婚式）」とかで使います。フランスの辞書にも「組み合わせがよいこと」と載っていて、違うものを並べておさまりがいい時に使うの。「ワインとチーズのマリアージュ」みたいにやたら食材とワインとの組み合わせについて使われるから、日本ではどこぞのソムリエが言い出したとみた！

ちなみにフランスで有名な紅茶屋さん「マリアージュフレール」は、創業者のマリアージュ兄弟の名前が由来。人気の紅茶はマルコポーロね。

（ノアゼットプレス公式podcast
「カフェノアゼット」第9回より）



ecole
Sympa
フランス語会話学校
エコールサンパ

03-3337-7933 / info@ecolesympa.com
表参道・阿佐ヶ谷・自由ヶ丘・オンライン

